

■ 「助けて」と言える関係を築く

近所付き合いなんて必要ない、誰とも関わり合いたくないと思っていた亜紀に、邦子は理解を示しつつもこう言います。

「一人じゃどうにもならないこともあるでしょ。困ったときには『助けて』って言える関係でいたいじゃない」
このような関係を築くために必要なことは何でしょうか。

まず、常日頃からお互い気に掛け合い、助け合うことがごく当たり前の関係＝「共助」の関係を育むことが挙げられます。と同時に助けられる本人が助けを求めなければ「無援」のままなので、本人が自ら助けを求めることも必要となります。

「自業自得だ」と言って、波岡はつながりや縁を拒んでいました。しかし、つながりや縁といったものは、互いに迷惑を掛け合い、それを許し合うことで成立するものではないでしょうか。

「俺みたいな人間はな、死んだ方がいいんだ」などと悪態をついていた波岡が、亜紀や邦子たちの継続的な寄り添いに、最後は「ありがとう」と人の心を受け止める気持ちになりました。

言葉の奥底にある真意に触れるには、辛抱強く諦めずに「聴く」という対話の姿勢で寄り添いながら、つながりを深めていくことが望まれるのではないのでしょうか。



映画のシーン



邦子 「地域の行事やなんかで声をかけようとしてもドアを開けてもくれない人、結構いるの。近所付き合いなんて必要ない。誰とも関わりたくないって人」

亜紀 「そういう人、東京にはいっぱいいましたよ。一人でいる方がよっぽど気楽だって人が」

邦子 「もちろんそれは分かるのよ。でも、世の中どんなに便利になっても一人じゃどうにもならないことあるでしょ。困った時には『助けて』って言える関係でいたいじゃない」



邦子 「でもね、私はこのまちがなによりも好きなの。私がこのまちに来た時にみんなが温かく迎えてくれたの。今じゃみ～んな家族みたいに思ってる」

「命はつながっている」

コラム

「俺みたいな人間はな、死んだ方がいいんだ」

「この30年、な〜んもいいことなんてなかった。みんな、汚いもん見るみたいにして俺のことを…。でも、あんたらに最後に良くしてもらって。今なら少しは人間らしく死ねる気がするよ」

そんな思いを抱く波岡に対して、亜紀が叫びます。「死ぬなんて簡単に言わないでください！ 人の命って、人が生まれてくることってすごいことなんです。奇跡なんです」と。命を大切にしてほしい。子どもができずに苦しんできた亜紀の心の叫びでもありました。

そうした亜紀の思いを知った邦子もまた、発達障害の息子を育てながら、周囲の無理解の中で苦しみ、心中まで考えた過去を告白します。その苦しみから救ってくれたのは、「人と人の心のつながり」だったのです。邦子は言います。

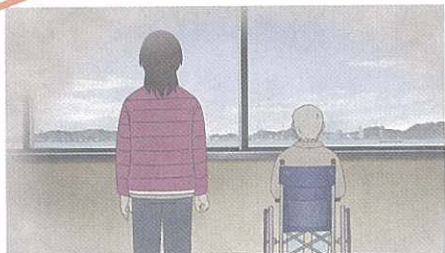
「命って、親から子につながっていきただけじゃないと思うの。人と人の触れ合いの中で自然とつながっていくものじゃないかな」

親から子へ。命はつながっていく。私たちの命は連綿とした命のつながりの中で、『今』を紡いでいます。

しかし、断ち切れようとした邦子親子の命が、民生委員で書道家の橋本によってつながったように、また、死んだ方がいいとまで言った波岡が、邦子や亜紀によって娘たちという希望に出会えたように、人と人のふれあいの中でつながり、育まれていく命があるのです。



映画のシーン



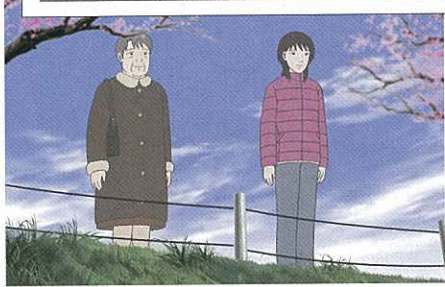
波岡 「会えないよ。俺は30年以上も前に家族を捨てたんだ。好き勝手やって借金こさえてよ。いまさらこんなのが現れても娘たちは迷惑だよ」

亜紀 「いいんですか、このまま娘さんたちに会えなくても」

波岡 「ああ…自業自得だ」



波岡 「あんたらに最後にこんな良くしてもらって。今なら少しは人間らしく死ねる気がするよ。ありがとうございます」



邦子 「でも…それでつながったのよ。もちろん、先のこととは分からないけど、私たちはこれからも波岡さんを見守っていきましょう」

亜紀 「はい」